銭形平次捕物控

ガラツ八祝言

野村胡堂

青空文庫

一

ガラツ八の八五郎が、その晩聟入をすることになりました。

祝言の相手は金澤町の酒屋で、この邊では有福の聞えのある多賀屋勘兵衞。嫁はその一粒種で、浮氣つぽいが、綺麗さでは評判の高いお福といふ十九の娘、――これが本當の祝言だと、ガラツ八は十手捕繩を返上して、大店の聟養子に納まるところですが、殘念乍らそんなうまいわけには行きません。

實際のところは、その晩聟入りの行列などを組んで歩いたら、命を奪られるかも知れないといふ、――眞實の聟、仲屋の伜錦太郎に頼まれて、いや〳〵乍らガラツ八は、聟入の贋物になることを引受けさせられてしまつたのです。

この頼みが持込まれたとき、さすが暢氣者のガラツ八も、再三辭退しました。が、錦太郎の頼みが如何にも眞劍で、涙を流さぬばかりに拝むのと、親分の錢形平次が、多賀屋の身上、主人勘兵衞の評判から、娘お福の行状、それから聟の仲屋の暮し向きから、錦太郎の人柄まで調べ抜き、『成程これは、うつかり祝言をさせられない』といふことが解り、自分からもガラツ八を説いて、『いざ三々九度の杯といふ時、眞物の聟の錦太郎と入れ替はらせるから』といふ條件で、漸く聟入の僞首になることを承知させたのでした。

祝言は多賀屋の身代にしては出來るだけつゝましやかに、當日の客は餘儀ない親類を五六人だけ、聟入りもほんの型ばかりといふことにして、僞首の八五郎が、仲人寶屋祐左衛門夫婦に護られ、駕籠の垂を深々とおろして、多賀屋へ乘込んで行つたのは、秋の宵——酉刻半そこ〳〵といふ早い時刻でした。

途中は平次の子分や、ガラツ八の友達が多勢で見護り、行列は先づ何の障りもなく多賀屋の門口を入りました。紋切型の挨拶を上の空に聞いて、奧へ通されると親分の平次が、恐ろしく眞面目腐つた顏をして迎へてくれます。

「どうだい八、滿更惡い心持ぢやあるめえ」

最初の平次の言葉はこんな調子でした。

「變な心持ですよ、親分」

「あやかりものだよ、——化け序にもう少しその儘にしてゐてくれ。眞物の聟は陽が暮れると直ぐ此處に來て居るが、肝腎の嫁の支度が出來ない。三々九度はいづれ一刻も後のことだらう、その時はお客樣で鱈腹呑むが宜い」

「呑んだつてつまらねえ」

「ひどく落膽するぢやないか、——だがな八。聟にもよりけりだが命を狙はれる聟なんてものは、あまり有難くないぜ」

「有難くなくたつて、僞首よりは器量が良いぢやありませんか」

「まア、さう言ふな」

ガラツ八の不滿は、平次も察しないではありませんが、斯うするより外に術のない切羽詰つた情勢だつたのです。

「親分は、いろ〳〵の事を調べたんでせう」

「まア、調べたつもりだ」

「誰が一體聟を殺さうなんて氣持になつて居るんで――」

聟の錦太郎が青くなつて平次のところへ飛込んだのは知つてゐますが、深い事情はガラツ八もよくは知らなかつたのでせう。

「金澤町の若い男は皆んなだよ」

「ヘエー」

「大きな聲ぢや言へねえが、よくもあんなに若い男と懇意になつたと思ふ位だ」

「ヘエー達者な娘だね」

「祝言の晩錦太郎を打ち殺さうと言ひ出したのは三人ある」

「ヘエー」

「中でも氣違ひじみてゐるのは、やくざの信三郎と髪結ひの浪藏さ、――聟の錦太郎奴、歩いて來るなら刀で向ふが、駕籠で來るなら何處かに待ち伏せしてゐて、土手つ腹へ槍をブチ込んでやる――つて、言つて居たさうだ」

「危ねえな、親分」

ガラツ八も少しばかり薄寒い心持になります。

「尤も、お前には其處までは聽かせなかつたよ、土壇場になつて、聟の身代りになるのが嫌なんて言ひ出されると困るからな」

「呆れ返るぜ」

何んな仔細があるか解りませんが、杯事の始まる前、聟の支度部屋を占領して、平次はガラツ八相手にこんな無駄を言つて居るのでした。

「大丈夫だつたのかい、八。よく脇腹のあたりを見るが宜い、槍の棘なんか殘つてゐると、後でとがめるよ」

「冗談ぢやない、槍の棘なんか立てられてたまるものですか、——本當にそんな危ない聟入だつたんですかい、親分」

ガラツ八も、濟んだこと乍ら、今更怖毛をふるひました。

「大丈夫だよ、吠える犬は噛み付かない」

「ヘエ——」

「その上、途中は二十人もの眼で見張らせたんだ。信三郎や浪藏は指も差せるこつちやない」

「驚いたね、どうも。そんな話を聽くと脇腹がムヅムヅしますよ」

「三々九度の杯さへ濟んでしまへば此方のものだ。人の女房になつてしまつたお福のために、

人殺しの罪を背負つて、お處刑臺に載つかるのはどう考へたつて智恵が無さ過ぎるよ、今晩一と晩だけ越せば天下泰平さ」

「そんな思ひまでして、あの錦太郎とか言ふ野郎は祝言をし度いのかね、男の切れつ端のくせに」

八五郎が少しく義憤を感じたのも無理のないことでした。仲屋の錦太郎といふのは、身上こそ輕いが、なか〳〵の好い男で、金持の一人娘で、神田の指折りの綺麗首であるにしても、評判の蓮葉娘の智には惜しいほどの若者だつたのです。

「多賀屋は神田で幾軒といふ分限だ、その上お福はあの通り美しい。大概のことなら無理をし度くなるだらうよ。それに、多賀屋の主人勘兵衛と、仲屋の先代は無二の仲で、やりませう、是非貰はうと約束し、藁のうちから證文を入れたり證人を立てたりしたほどの許嫁なんだとよ」

「不自由なことだね」

「町人はそれが何よりのほまれさ、約束を守るといふのは決して悪いことぢやない」

「本人の氣持などを其方のけにね」

「大層今晩は機嫌が悪いやうだな、八」

「金澤町小町のお預けなんぞ喰はされると、大概機嫌も惡くなりますよ」

ガラツ八は全く以ての外の機嫌でした。

「ところで、盃事の支度はまだかな」
「親分はそんなにして居て構ひませんか」
「構はないとも、狙はれてるのは聟だらう。その聟が此處に居るんだもの、平次が斯う附いてゐるほど確かなことはないぢやないか」
「全くね」
ガラツ八の八五郎は、照れ臭く袴の皺ばかり氣にして居ります。どうもしびれが切れて叶はない恰好です。
「尤も、眞物の聟でなくて、お前は本當に仕合せだつたかも知れないよ」
平次は話頭を轉じました。
「ヘエ――？」
「あんな評判の蓮葉娘のお守をして、一生踏み付けられて暮すのは、樂な仕事ぢやないぜ」
平次の聲は小さくなりました。
「ヘエ」
「その上仲屋は十年も前に身代限りをして、近頃は其日の物にも困つてゐるんだ。錦太郎はどんなに齒ぎしりしても、多賀屋へ聟にでも入らなきや身の立てやうはない」
「――」
「親と親との昔々の約束は、お福を仲屋が貰つて、錦太郎の嫁にする筈だつたとよ。それが、

仲屋の主人が死んで、身代が滅茶々々になつて仕舞ふと、一人娘を嫁にくれとは言ひにくからう」

「成る程ね」

「尤も錦太郎は腹の中ぢや面白くないかも知れないよ、――それに、聽えるかい、八」

「ヘエ」

「錦太郎には他に言ひ交した女があるんだつてね」

「太てえ野郎だね」

「でも、背に腹は代へられなかつたのだらう」

「俺なら背と腹を代へるがな」

「それは他人樣の言ふことだ、――おや？」

不意に平次は聽耳を立てました。

「何です、親分？」

「變な音がしたやうだ、――來い、八」

「あつしが行つても構ひませんか」

「その窮屈袋と紋附をかなぐり捨てるんだ」

言ひ捨てて平次は飛出しました。かなり大きな構へですが、唐紙を二つばかり開けると、其處は嫁の支度部屋になつて居たのです。

二

「あつ」
「灯だ、灯だ」
平次の聲が響くと、さすがに氣の付いたガラツ八は、行燈を提げて飛込んで來ました。
「嫁がやられたツ」
灯の中に崩折れた花嫁姿、緋縮緬が血のやうに燃えて、それは凄まじくも華やかに浮いたのです。
「入つちやならねえ、入つた奴には皆んな下手人の疑ひがかゝるぞ。八、其處で頑張つて、一々出入りの顔を調べろ」
平次の聲が響くと、廊下まで殺到した群集が、雪崩を打つて引返します。
「私は構はないでせう、親分」
その跡に取り殘されて、おろ〳〵して居るのは眞物の聟、仲屋の錦太郎でした。二十五六の華奢な男、青い顔をして、激動に顫へて居りますが、性根はなか〳〵の確りものらしくもあります。
「いや、こいつは智殿に見せる幕ぢやねえ。親御の勘兵衞さんだけ入つて下さい——それから

町内の外科を大急ぎで頼むんだ、深傷だが、命は――」

平次は手負を抱き起してフツと口を縅みました。

「親分さん」

この時、漸く主人の勘兵衛が飛んで來たのです。

「大變なことになつたぜ、御主人」

「どうしませう、親分」

六十男の勘兵衛は、娘の後ろから恐る〳〵差のぞきます。それでも、自分の身體で庇つて、多勢の目から手負の姿を見せないやうにし乍ら――。

「八、何をぼんやりしてゐるんだ。曲者は外へは出られない筈だ、出口々々は先刻の俺の聲一つで、二十人の下つ引が固めてゐる。手前は錦太郎を見張つてゐるが宜い。自棄になつた曲者は何をやり出すか解らない」

平次の命令は周到を極めます。

そのうちに外科が來て、花嫁の傷をしらべました。傷は深くはないが、急所をやられたので、朝までの命がむづかしからうと言ふ噂が、誰からともなくパツと家中に傳はります。

手負を外科と主人に任せた平次は、花嫁の支度部屋から出發して、縁側へ、庭へと調べて行きました。此道以外は人目の關が幾重にもあつた筈ですから、どんな忍びの名人でも、人に見とがめられずには通れなかつた筈です。

たつた一つの手燭で、平次は實によく調べて行きます。生濕りの庭には誂へたやうに足跡があつて、それがかなり大きいことや、突當りの木戸は外から簡單に輪鍵の外せることを見極め、

「ゐるか」

靜かに聲をかけると、

「親分」

木戸の外から應へた者があります。言ふ迄もなく下つ引の一人。

「誰も出た者は無いな」

「ありませんよ、親分」

「誰でも構はない、外へ飛出さうとする者があつたら、遠慮無しに縛り上げてくれ」

「ヘエ――」

「御苦勞だな」

平次は言ひ捨てて元の縁側に歸りました。

「おや？」

見ると、其處にも泥の足跡が――よく拭き込んだ縁の板を薄く染めて居るではありませんか。足跡を追つて行くと、眞つ直ぐに花嫁の部屋に入つて行きます。

念の爲にツイ傍の上便所の扉をあけると、二本燈心の薄明りで、――草履が一足。手に取り上げて裏返すと、生濕りの苔臭い土が一面に附いてゐるではありませんか。

「親分」
不意にガラツ八が顔を出しました。
「何だ、八？」
「刃物を見付けました」
手拭に包んで來たのは、匕首が一口、切先が血に染んで、少し刃こぼれがあります。
「何處にあつたんだ」
「あつしが居た部屋の花瓶の中ですよ」
「誰が見付けたんだ」
「錦太郎が氣が付いたんで――」
「馬鹿ツ、――その錦太郎を見張つて居ろと言つたぢやないか」
平次の聲は急に激しくなりました。
「だつて、親分」
「何がだつてだ、――刃物なんざ、何處にあつたつて構ふものか、錦太郎に間違ひがあつたらどうするつもりだ」
「ヘエ――」
ガラツ八は不平らしく引返しました。暫くその後ろ姿を見送つて居た平次、何を思ひ付いたか、猛然として後を追ひます。が、それも及びませんでした。ガラツ八が一寸眼を離した間に、

事件は思ひも寄らぬ方へ急展開をしたのです。

「あツ、やられたツ」

ガラツ八の聲が突つ走ります。

「やつたな、畜生ツ」

飛込む平次。先刻まで平次とガラツ八が居た部屋に、錦太郎は半顏血に塗(まみ)れて、氣を喪(うしな)つて居たのです。

「どうした」

「氣をしつかり持て」

平次はそれを後ろから抱(かか)へて、あり合せのぬるくなつた茶を呑ませました。

「あ、有難うございます、もう大丈夫です」

錦太郎は極り惡さうに居住(ゐずまひ)を直します。

「どうしたといふのだ」

「何處からともなく、こいつが飛んで來ましたよ。頰に當つたことまでは知つて居ますが——面目次第も御座いません。私は氣が弱いんで」

錦太郎は恥かしさうに首を垂れます。切られたのは左の頰先、ほんの引つ掻きほどですが、潮時と見えて、血が顏半分を染めて居ります。——尤も錦太郎が夢中で傷を押へた手で汚(よご)したせゐかも知れません。

刃物はガラツ八が差して來た、犬おどかしのやうな脇差。こいつは聟入の恰好には無くてならぬ道具ですが、先刻此處へ拋り出して、嫁の部屋へ驅付けたのを、曲者は早速利用して、縁側から拋つたのでせう。

「曲者の顏を見なかつたのかい」

傷を見乍ら平次は訊ねました。

「後ろから拋られたんで、何んにも見ません」

「そいつは災難だつたね。尤も、大難が小難で濟んだやうなものだ。幸ひ、町内の外科が來て居るから、手當して貰ふがよからう」

「有難うございます」

「ところで、曲者はいよ〳〵家の中に居るに決つたぞ。床を剝ぎ、天井へ潛り込んでも搜し出さう、八」

「おーい」

「何處に居るんだ」

「押入の中ですよ」

八五郎の返事は陰に籠りました。

「その意氣だ、しつかり搜せ、——外から二三人呼び入れて手傳はせても宜い」

三

疑ひは三人にかゝりました。

多賀屋の外を、ウロウロして居た、やくざの信三郎と、髪結の浪藏と、――これはお福の甘い言葉に取り逆上せて、是が非でも祝言を妨げようといふ仲間――。

あとの一人は、多賀屋の番頭で品吉、三十そこ〳〵の平凡な男ですが、これもお福の笑顏に釣られて、多賀屋の養子になれるものと思ひ込んでゐた男でした。

三人とも機會がありました。が、便所の草履をはいて細工をしたり、匕首を聟の部屋の花瓶に入れるやうなことは、品吉でなければ出來ない藝當です。

「此野郎ですよ、親分。思ひ切り引叩いて見ませうか」

聟から岡つ引に引拔いたガラツ八は、品吉を縁側に引据ゑて威猛高になります。

「待て〳〵、もう少し考へてからにしよう。家に居る者が怪しいとなると、手代、下女、下男、それからお前も俺も、聟の錦太郎も怪しくなる、――こいつはそんな淺墓な企みぢやあるめえ。その番頭は下つ引に見張らせて置け、――ところで曲者は錦太郎を殺すつもりは無かつたかも知れないが、――お福は確かに殺すつもりだつた、――お福を殺して一體誰が儲かるんだ」

「――」

平次が變なことを言ひ出すのを、ガラツ八は縁側から聽いて居りました。

「お福が死んで、一番損をするのは誰だ」
「父親と聟の錦太郎ぢやありませんか」
ガラツ八の應へは素直で簡明です。
「ところで今は何刻だらう」
平次は又變な事を訊きます。
「亥刻半ですよ、親分」
「あと半刻で明日か」
「――」
「明日は戌で佛滅で、やぶるといふ日だ。祝言には一番嫌はれる」
「それが何うしたんで、親分」
「明日祝言がいけないとなると、今日のうちでなければなるまい」
「誰が祝言をするんで？　親分」
「多賀屋の娘お福と、仲屋の倅錦太郎だ」
「えツ」
平次の言葉の意外さに、驚いたのは、隣の部屋で外科に手當をして貰つて居る錦太郎自身でした。
「お福は深傷だが、折角此處まで運んだ祝言、息のあるうちに盃事がしたいと言ふのだよ。し

をらしい望みぢやないか。父親の勘兵衛は、涙乍らにその支度をしてゐる。幸ひ聟の錦太郎は淺傷だ、子刻前に祝言の盃事をして、死んで行く娘に安心させようと言ふのだ」

「――」

ガラツ八と錦太郎はゴクリと固唾を呑みました。事件のあまりに不思議な展開に、考へることも、異議を挟むことも出來なかつたのです。

「この上に妨げが入つてはいけない。浪藏と信三郎と品吉は縛つてあるが、この上何處に寢刃を合せてゐる者が無いとは限らない。善は急げだ、手當が濟んだら行かうか」

平次は斯う錦太郎と八五郎を促し立てるのです。

四

その夜の婚禮は、世にも不思議なものでした。

多賀屋の二階二た間を打ち拔き、善美を盡した調度の中に、眩ゆいばかりの銀燭に照らされて、凄まじくも早桶が一つ置いてあつたのです。

金屏風、島臺、世の常の目出度いづくめの背景の中に、それはまた、何と言ふ恐ろしい取り合せでせう。

早桶を中に、仲人寶屋祐左衞門夫婦、多賀屋の主人勘兵衞、親類五六人、老番頭宅松が左右

に居並びました。

一歩、この席に入つた錦太郎の顔色は、さすがにサツと變つたのも無理はありません。

「これは？」

ツイ唇をついて出た言葉、頬の色は半面を包んだ繃帯よりも白く見えます。

「娘は到頭相果てました、曲者の手に掛つて、たつた十九で――」

多賀屋勘兵衛は絶句しい〳〵、教はつたせりふのやうに、斯う言ふのです。

「それで、私は、私は？」

「祝言の盃事をするのだ。あんなに焦れた仲だもの、せめて三々九度でも濟まさなきや浮び切れまい」

平次の聲は妙に荒つぽく響きました。

「――」

寂とした一座、兎もすれば、滅入るやうな緘默が續きさうでなりません。

「さア、早桶の蓋を拂つて、花嫁の最期の姿と對面してくれ」

平次は後ろからせき立てます。

「――」

思はず尻ごみする錦太郎。

「解らねえ智ぢやないか、三々九度は僞首ぢや勤まらないよ」

ガラツ八は後ろから抱きすくめるやうに、早桶の傍の座に錦太郎を引据ゑました。

「そんなに遠慮するなら蓋は俺が取つてやらう」

平次は早桶の側に寄ると、その蓋を取つて、桶ごとパツと引つくり返しました。

「あツ」

中から現はれたのは、お福の死骸と思ひきや、――血の附いた匕首と、ガラツ八の脇差と、便所の草履と、それから、最後に一つ、血に染んだ手拭が一と筋。

「錦太郎、これを知つて居るだらう。手拭はお前の品に相違あるまい、花嫁を殺して間もなく押入で見付けた品だ」

「――」

「さア、のがれぬところだ、白状せい。聟入の晩、花嫁を自分の手で殺すとは何としたことだ、――言ひのがれは無用だぞ。此の家は宵から大勢で取圍んでゐる、曲者は外から入る筈はない」

叱※する平次、一座は思はず逃腰になつて、この不思議なクライマツクスを見詰めて居ります。

錦太郎は唇を噛みました。が、暫く自分の心持を落着けると、白々とした觀念の顔を擧げ、キツと平次を睨み、それから主人勘兵衞を見据ゑ乍ら、少しかすれたが、落着拂つた聲で斯う言ふのです。

「白状する迄もあるまい、――殺したがどうした」

「錦太郎、それがお前の言ふ事か」

平次も思はずカツとなります。

「お、三千兩の身上を横取りされた上、江戸一番の蓮葉娘と添ふ位なら――俺はどんな事でもする」

錦太郎の聲は次第に疳が立つて、引裂かれるやうな調子になります。

「宜い心掛けだ、――が、お前は誰を相手にして芝居を打つてゐるか忘れたんだらう、――俺のところへ驅け込んで、聲の身代りを頼んだ時から、俺は臭いと睨んだよ。手を盡して調べ抜いて、萬に一つの手抜りの無いところまで運んで置いたとは知るまい、――罠に陷ちたのはこの平次ではなくて、お前だつた」

「それほど用心深い錢形平次が、お福の殺されるのを知らずに居たらう」

錦太郎は勝利感に陶醉して亢然となりました。

「よし〳〵、その氣で居るなら逢はせるものがある、――それ」

平次の手が動くと、錦太郎の後ろの金屏風が取拂はれました。その奥に置かれたやうに坐つて居るのは、何と、錦太郎が殺したと思ひ込んでゐる、お福の健やかな姿ではありませんか。

「あツ、お前は、お前は」

驚く錦太郎。

「驚いた錦太郎、聲に身代りがあれば、嫁にも身代りがある事に氣が付かなかつたらう。お前

が匕首で突いたのは、忠義な下女のお常だ。振袖の下へ鎖帷子を着せて置いたので、力任せで刺した匕首も、五分とは斬らなかつたよ」

「――」

錦太郎は何べんかお福に飛びかゝりさうにしましたが、その都度、平次の眼に威壓されて、キリキリと齒を喰ひしばるばかりです。

「便所の草履をはいて、庭木戸を開け、曲者が外から入つたやうに見せかけたり、八五郎の脇差で、自分の顏を斬つて、自分の身體に附いた血を胡麻化したりしても、この平次の眼を騙すことは出來ない」

「――」

「お前は――」

續ける平次の聲を遮つて、錦太郎の怒りは爆發しました。

「止してくれ、俺はその豚の仔のやうな雌と祝言せずに濟んだだけでも澤山だ、――何でえ、岡つ引のくせに。何も彼も見拔いたつもりでも、人の心の見透しはつくまい」

五

「それがどうした」

静かに迎へた平次、このたけり狂ふ男に、もう少し事情を説明させる必要があつたのでせう。

「何も彼も見抜いても、多賀屋勘兵衛の惡企みだけは見抜けなかつたぢやないか」

「何？」

「言つてやらう、――その多賀屋勘兵衛は、今から十年前、死にかけてゐる俺の父親を騙し、親切ごかしに、仲屋の身上を皆んな取上げてしまつた大惡黨だ」

「嘘だ」

勘兵衛は不意に呶鳴りました。よく光る頭から、ポツポツと湯氣が立つて居ります。

「――」

平次は默つてそれを押へたまゝ、一方、錦太郎の言葉を續けさせました。

「俺が成人するまでといふ約束だつた、――證人はうんとある、現に此處に居る仲人の寶屋もその證人の一人になつて宜い筈だ。取上げた金は三千兩、――この錦太郎が成人すれば返す筈のが、二十歳になつても二十五になつても返さない。お蔭で俺は仲屋の暖簾と貧乏を背負つて、血の出るやうな苦勞をし乍ら育つた」

「――」

「父親の遺言狀は寶屋が預つて居る。それには、お福とこの錦太郎を一緒にする約束が書いてある筈だ。萬一、二人が一緒にならない時は、三千兩の金は利息をつけて俺に返さなければならない。十年の利息をつけて、三千兩の金を返すことは、今では多賀屋の身代を振つても出

來ないことだ」

「――」

「お福を俺の嫁にしても、行く〳〵は仲屋のものは仲屋に返さなければなるまい。――惡智惠のたけた勘兵衛は、俺を聟にして多賀屋の養子に直し、難癖をつけて追出すことを考へた、――賣女根性の――江戸一番の性惡娘を、この錦太郎に押し付け、嫌應言はせぬ祝言させようといふのは、皆んなそのためだ。俺は斷つたとも。一應も二應も斷つたが、――十年越の借金を拂つて、母一人を安穩に養ふためには、斷つてばかりも居られなかつた。――口惜しいが俺は承知した。言ひ交した女には因果を含め、――母にも觀念して貰つて――」

錦太郎は泣いて居りました、苦澁の色が顏一面の筋肉を痙攣させて、聲のない嗚咽が、時々激情の言葉を吃らせます。

「それから何うした」

と穩やかに平次。

「俺は捨鉢になつた。が、母が生きてゐるうちは、命を捨てて多賀屋へ斬込むわけにも行かない。お福が江戸一番の蓮葉娘で、大勢の馬鹿な男に騷がれて居るのを幸ひ、親分に賴んで見代りの聟を仕立てて貰ひ、俺はそつと此處へ來て、お福を殺す工夫をした。大身代を繼ぐ花聟が、金澤町小町と言はれた嫁を、婚禮の晩に殺す筈はないと世間では思ふだらう」

錦太郎の言葉は次第にか細い述懷になつて、ともすれば途切れます。

「それから？」

平次はもう一度靜かに促しました。

「お福さへ居なきや、俺は勝手だ。親父の遺言狀が出ても、三千兩の身上を受取るだけで、何の怖いこともない」

「――」

「細工が過ぎて親分に見現はされた、――口惜しいが仕方がない。サア、縛つてくれ、磔刑にでも火焙りにでもしてくれ、――その代り、萬一俺の母親が餓死するやうな事があつたら、俺は死んだつてお前達を安穩には置かないぞ」

紋附姿の錦太郎が、身を顫はせ、疊を叩いて斯う言ふのです。

「嘘だ〳〵」

抗辯もしどろもどろに、多賀屋勘兵衞は立つたり坐つたりして居ります。

誰ももう、口を利く者もありません。

平次は一座の空氣を、愼重に味ひ盡しました。善惡邪正が、鏡に映るやうに判つて行くやうな氣がします。

「八」

「ヘエ――」

突如、平次に呼ばれてガラツ八は入つて來ました。

「この家は出口々々を塞いでゐるだらうな」
「ヘエ――、下つ引が五六十人、十重二十重に圍んでゐますよ」
「よし〳〵」
八五郎の應への常識以上に大袈裟なのを、平次は笑ひもせずにうなづきました。
「何をやらかすんで、親分」
「俺の指した野郎を縛れ」
「ヘエ――」
「それ」
平次の指は、ピタリと、仲人寶屋祐左衞門の胸を指したのです。
「御用ツ」
「わツ、御勘辨。私は、私は何にも知りません」
あわてた寶屋、疊の上を額で泳ぐやうな恰好になるのを、ガラツ八は襟髪を取つてピタリと引据ゑました。
「野郎ツ、神妙にせいツ」
「申します、申します。皆んな申上げてしまひます。――多賀屋さんには數々のお世話になつて居るので、斷り切れなかつたのでございます。――仲屋さんの先代の遺言状は、すぐ此場で錦太郎さんにお渡し申します、――御勘辨を。お願ひ」

寶屋祐左衛門は、懐中から紙入を取出して、ガラツ八の腕力の下に、何やらモゾモゾ續けて居ります。

「多賀屋さん、この祝言は取止めにしても異存はあるまいな」

平次は勘兵衛の方へピタリと向きました。

「それはもう、親分さん。娘の命を狙ふ者を養子になどは――」

勘兵衛はブルブルと頭を振りました。

「よし〳〵。それでは、仲屋の先代の遺言通り、三千兩に利息をつけて、この錦太郎に返してやつちやどうだ。いやならお白洲へ持出すが」

「それは親分、殺生ですよ。三千兩に十年間の利息をつけて出しちや、多賀屋が潰れてしまひます」

勘兵衛は泣き出しさうです。

「貧乏になるのも洒落れてゐるぜ。世帶の苦勞をさせると、第一娘がもう少し悧口になるよ、貧乏の味のよさを知らないのが金持の落度なんだ」

「親分、それは可哀想ぢやございませんか」

「まだ〳〵可哀想な人間は、廣い世界にうんとあるぜ」

平次はなか〳〵譲りさうもありません。

「親分」

錦太郎は顔をあげました。

「何だい」

「お禮の申上げやうも御座いません。――親分のお心持はよく解りました。さうとも知らずに、御手數を掛けた上、數々惡口を言つて――」

錦太郎はボロボロと涙をこぼし乍ら、疊の上へ雙手を突くのです。

「氣が立つと、餘計な事も言ふものだ。そんな事は心配しなくて宜い」

と平次。

「親分、――私も此上慾張つたことは申しません。あの化け娘と一緒にならずに三千兩返して貰へば、それで澤山です、――利息なんか、一文も要りません」

「それは本氣か、錦太郎」

平次は眉を開きました。錦太郎の言葉が、此空氣の中では、かなり豫想外だつたのです。

「本當ですとも、親分。六十になる母親の老先を幸せにするだけなら、三千兩でも多過ぎる位で、あとは私が精一杯働きます。何んなら――」

「よし〳〵、それ以上負けさしちや、多賀屋も冥利が惡からう。お前は思つたより良い男だ、手の混んだ人殺しなんかするより、心を入れ替へて商賣でも勵むがよからう。下女のお常の引つ掻き位は、俺が何とかしてやらう。なア、多賀屋」

「ヘエ」

「三千兩の利息で、膏藥がどれ位買へると思ふ」

平次はそんな無駄を言ひ乍ら、もう歸る支度をして居りました。

× × ×

「溜飲が下がつたぜ、親分」

曉方近い街、女房のお靜が待つて居る家路を急ぎ乍ら、平次は應へました。

「氣の毒なのはお福さ、心柄とは言ひ乍ら、あれぢや江戸中に貰ひ手もあるまい」

「あつしは親分」

八五郎はニヤリニヤリとほろ苦い笑ひを見せます。

「お前も氣の毒だよ、たま〳〵祝言をする事になると思ふと、それが身代りだつたりして、——でも、あんな蓮葉娘と祝言しなくて飛んだ仕合せよ。そのうちに、煮豆屋のお勘ツ子にでも當つて見ねえ、あの娘の方が餘つ程筋が宜いぜ」

「チエツ」

八五郎は大きな舌打を一つしましたが、腹の中では怒つてるわけではありません。親分平次の今晩の裁きの鮮やかさに、すつかり陶醉して居たのです。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物全集第十六巻　笑ひ茸」同光社磯部書房
　　1953（昭和28）年9月28日発行
※題名「銭形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：門田裕志
2014年2月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

ガラツ八祝言

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　野村胡堂
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/